令和４年度小松市立矢田野小学校　学校評価２

	目標・具体的取り組み	取組の状況（中間・８月提出）	取組の成果と課題（年度末・３月提出）
生徒指導	生徒指導３機能を生かした授業づくり・学級づくりの推進 ・生徒指導３機能を生かした授業づくりや学級づくりを通して、児童の自己指導能力の育成を目指すことを全職員で共通理解し、共通実践につなげていく。 ・学校研究と連携を図り、「学校研究検証シート」によるセルフチェックを活用したり、職員間での取り組みの共有化を図ったりして、教職員の生徒指導３機能を生かした授業づくりや学級づくりの意識を高め、共通実践を進める。	・１学期は、共感的人間関係の育成を目指し、学校研究と連携して取組を進めることができた。４月には、共感的な人間関係の育成を目指した活動例を紹介し、各学年で実践することができた。また「学校研究検証シート」を活用してセルフチェックを行い、教職員が意識して取組を進めることができた。 ・２学期は、児童の主体性や自主性を育成するために、①目的意識を持たせる②自己決定の場を設ける③責任を持たせて取り組ませる④児童に振り返らせる（その際に、教職員が個人や全体の頑張りを認める言葉かけ・価値づけを行う）の４つのサイクルで、様々な活動に取り組ませていきたい。 ・生徒指導の３機能としては、「自己有用感の向上」を重点とし、言葉かけの例を共有した上で、継続して取組を進めていきたい。	・２学期は、児童の主体性と自己有用感の向上を目指し、教職員でそのための４つのステップを共有し、取り組みを進めた。また学校研究と連携させ、「矢田野っ子ＵＰシート」を活用し、教職員が意識して取り組みを進めた。また矢田野っ子ＵＰシートを活用して、教職員の自己評価を月１回行ったり、月末の職員終礼で学年間で取り組みを共有したりした。 ・結果として、教職員の意識の向上が見られた。２学期末の教職員アンケートでは、教職員の自己評価が３６％も向上した。これは、教職員が意識して児童の自己有用感の向上を目指して取り組みを進めた結果と言える。 ・しかし、児童の回答は８２％という結果であり、児童と教職員の結果には１０％程度の差が見られる。児童自身が「自分には、よいところがある」と実感できるように、この取り組みを継続して進めていく必要がある。
特別支援教育	＜自分を大切にし、意欲を持って、前向きに生活できる児童を育てる＞ ・児童理解の会や校内委員会等の場を活用し、児童の特性を共通理解し、職員相互で協議して個に応じた支援策を考え、共通実践を進めていく。 ・校内の人材（SC,心の相談員、支援員）を有効に活用し、児童・生徒に寄り添い、その困り感を支え、前向きに生活できるように支援する。 ・幼保小中の連携を密にし、長期間で子どもの育ちを支援する。	・毎月の児童理解の会では、気になる児童についての情報共有を行うことで、職員の協力体制を築くことができた。校内委員会を学年ごとに行うことで、児童の特性を丁寧に見取り、対応策について協議することができた。2学期以降は、校内委員会の実施日の設定を工夫し、より効果的に支援を行っていきたい。 ・SC、心の相談員には、児童に寄り添って教室の内外で関わって頂いた。おかげで、児童は元気に登校することができた。また保護者面談等に向けて、アドバイスを頂き、話し合うポイントを整理することができた。また支援員には、特別支援学級在籍児童や学習に集中できない児童等に寄り添って支援をして頂いた。おかげでどの児童も学習にスムーズに取り組むことができた。 ・夏季休業中に、幼保園を訪問し、園児の様子を参観して、情報収集を行う予定である。来年度入学予定の園児の実態を把握することで、幼保園と連携を図り、円滑な入学を支援していきたい。	・校内委員会では、学校生活に不適応を示したり、他の児童との関りが上手くできなかったりする児童について話し合う場を随時もった。時間的に余裕のない中ではあったが、重要な案件について複数で意見を出し合うことで、一人ひとりの児童の特性に応じた支援方策を考え実践することで児童の困り感によりそうことができた。 ・校内の人材の中でも、特に支援員・スクールカウンセラー・心の相談員の方には、学習支援、見守り支援、授業者の補助、学校生活に不適応児童の対応等で教育活動をより円滑に進められるように、毎日大変なお力添えをいただいた。。 ・中学校との連携についてはコロナウイルス感染症予防の観点から、中学校に訪問することができていない。3学期には6年生の中で学習面、行動面で気になる児童について情報を伝えていきたい。幼保・中学校との連携については、今後も継続的に行うことが望ましいと思われる。
道徳教育	＜道徳の時間を中心として道徳の授業力の向上を図る＞ ・講師を招聘し、授業づくりについて研修会を行い、子ども達が価値を深める授業を目指す。 ・１学期末と２学期末に道徳ノートまたはワークシートを家に持ち帰り，道徳や児童に対する保護者の理解を深める。また，子どもたちの励みになるように保護者からコメントを書いてもらう。	・県教員研修センターより、指導主事に来ていただき、道徳の授業作りと評価についての研修会を行う。２学期に向け、道徳の授業の始め方や、道徳の価値づけをしながら褒めるなど、２学期からの共通実践を全員で共有し実践していく。 ・夏休みは教科書を持ち帰り「道徳モラル」を読み、情報との向き合い方について家庭で考えてもらった。冬休みには道徳のノート（またはワークシート）の持ち帰り家庭で道徳の学びを共有できるようにしたい。	・夏季休業期間に石川県教員総合研修センター課長中越令氏を講師に迎えて研修会を行ない、授業作りと評価について共通理解を図ることができた。２学期に向けて、①価値理解、人間理解、他者理解を意図する発問で深まりのある授業作り、②振り返りの視点の活用、③道徳の時間（価値）と生活（言動）をつなげていく、この３点を共通実践としてきた。 ・夏休みは「道徳モラル」を親子で一緒に読み、話し合うことで情報との向き合い方を家庭で考えることができたようだった。冬休みは道徳ノートを家庭に持ち帰り、ノートを見た保護者から子どもの励みになるようなコメントを書いてもらった。 ・今年度は学年、学級間の道徳交流がなかった。そのため、来年度は授業の板書や子どもの振り返りを持ち寄り、共有できる場をもうけたい。
読書教育	＜読書の習慣化と質的向上を図り，不読者をなくす＞ ・おすすめの本を10冊以上読むと,プラス1冊券が,10冊以上読むと,プラス2冊券がもらえる。全校児童の90パーセント以上がおすすめの本を読んで,プラス券をもらえるように働きかける。おすすめの本を読むことで、読書の質的向上を図る。 ・いしかわ学校読書の日（小松市民読書の日）には,毎月３冊貸し出す。「先生のための図書だより」を発行し，担任からの声掛けをすることで，不読者をなくす。年に2回夏休みと冬休みには,親子読書にも取り組み,保護者にも読書に関心を持ってもらう。親子読書は95%の提出を目指す。 ・国語の授業で、年1回は並行読書を活用する。	・良書に親しむために勧めている「おすすめの本を読もう」の取組は、１学期末の時点で８１％であった。目標の９０％で、あと９％２３名で達成できそうである。２学期も毎月、「先生のためのとしょだより」を司書から発行し、それをもとに児童に声掛けをしていきたい。 ・いしかわ学校読書の日（小松市民読書の日）には、毎月３冊貸し出している。それにプラスして、おすすめの本を達成した児童はさらに本を１冊借りることができる。月に貸し出しが２冊以下の児童の数は、１学期は７人で一人当たりの本の貸出数は、４２冊であった。いろいろな取組を通して、読書の習慣化が身についてきたと思われる。夏休みの取組である親子読書も今年は、９５％を目指している。 ・並行読書は、１学期末の時点で５つの学年が活用できた。全学年が活用できるように他校の取組なども情報を集め、声掛けをしていきたい。	・良書に親しむために勧めている「おすすめの　本を読もう」の取り組みの達成率は、2学期末の時点で　89パーセントに達した。目標は、90パーセントなので、あと1パーセント3名である。11クラス中6クラスは100パーセント達成しているので、3学期は、クラスとして取り組むとさらに達成率が上がると考えられる。先生のための図書だよりと図書委員会からのお知らせで、目標の90パーセントになるように声掛けをしたい。 ・夏休みも親子読書に取り組んだ。今年度の達成率は、96.6パーセントであった。だいぶ定着してきている。担任の先生方の声かけおかげもあるし、家庭にも浸透してきていると思われる。 ・良書に親しむために、1年生は毎月家族読書に取り組んだ。読書の習慣化を図るためであるが、本好きな児童は確実に増えている。学校全体の傾向としては、図書館でよく本を借りる児童とそうでない児童の間にまだ格差があるので、それをなくすことがこれからの課題である。 ・並行読書は、2学期末の時点で全学年が活用できた。
保健健康教育	〈意欲的に、健やかな心身をはぐくむ〉 ・学期に1回以上、目や姿勢に関する保健指導とアンケート（児童・教職員）を実施し、成果と課題を分析して改善のための指導を行う。「スマホやタブレットを使うとき、目の健康をまもるために気をつけていることはありますか？」という質問に対して、「はい」と回答する児童が80%以上を目指す。（4月アンケートでは約55%←１年生のみアンケートがとれていないので6日にとります） ・毎月10日を「目の日」、11日を「姿勢の日」とし、月に１回学級で児童保健委員会を中心に取り組む。 ・10月の学校保健委員会では、児童保健委員会や厚生委員会を中心に学校全体で、目や姿勢について考える機会を作る。 ・年間を通して「3分間走やラダートレーニング、多種目ダッシュ」などの運動を取り入れて全体的な体力アップにつなげる。取り組んだ学級数が８０％以上になることを目指しアンケートで確認する。 ・児童が達成感や充実感を味わうよう、授業実践を工夫した学級数が80%以上になるようにし、体育科が好きになる児童を増やす。また、達成度はアンケートで確認する。	・１学期は、まず４月当初の身体二計測で、養護教諭が、目や姿勢に関するアンケートを取った。それを元に保健委員会で目の体操動画を作成し、各クラスで視聴した。その動画は、分かりやすくてとても好評であった。また、保健委員会では、目に関するミッションカードを作成し保健委員会の児童が各教室に持って行き、説明をした。どのクラスも積極的に取り組んだ。また２学期に行われる学校保健委員会でも目や姿勢について考える。そのために、保健委員会では、寸劇の練習をするなど、保健委員会の児童が主体的となって学校保健委員会をすることで、さらに児童の目や姿勢への意識を高められるようにする。 ・体育の取組として、１学期は、全クラスが3分間走やラダートレーニング、多種目ダッシュなどの運動を取り入れて、全体的な体力アップにつながる授業に取り組んだ。 ・児童が達成感や充実感を味わうよう、全クラスが授業実践を工夫した。例えば、水泳の授業では、泳力別に分かれて水泳の練習をした。児童は楽しみながら泳力を付けることができた。Ｔボールでは、バットの他に、ラケットを使うことにより、小さなボールを打つのが苦手だった児童もボールを打つことが出来、達成感を味わうことが出来たようだ。また、誰もが得点できるように、「バットを片付けると１点」など得点の入り方も工夫した。このような、教師の工夫で、体育科が好きになる児童を確実に増やすことができた。そういった取組を紹介し合い、さらに体育好きの児童を増やしていく。	・2学期は、新型コロナウイルス感染症予防のため延期となったが、保護者も迎えて学校保健委員会を公開することが出来た。今年度の学校保健委員会は、目の大切さについて取り上げた。いくつかの委員会に協力してもらい、児童が主体となる学校保健委員会を目指した。保護者にも寸劇してもらった。保護者アンケートの回答からは「楽しみてみることができた」「目のことが勉強となた」など肯定的な意見があった。特に保健委員会の児童による寸劇は、大好評であった。目についての○×クイズも、児童参加型の取り組みでとても分かりやすくてよかった。これらの取り組みは、目や姿勢に対する意識を高めるきっかけにもなったと思う。 ・体育の取り組みとして、授業の初めに「３分間走やラダー、多種目ダッシュ」などに全クラスが取り組むことができた。運動の特性に合ったウォーミングアップを取り入れ、種目の幅を広げていきたい。 ・達成感、充実感を味わう工夫を取り入れたクラスは７２％であった。具体的にどのような工夫が児童の達成感や充実感につながり、体力向上につなげられるのか職員間での共有が必要だと感じた。外部講師から得たメソッドで効果のあったものも共有していく必要がある。

学校関係者評価	１）中間評価（＆改善策）を受け ・学力だけではなく、「人間を育てる」という意識をもって育てることが大切。 ・教師の働き方については、地域の方が講師になったり、工夫するとよい。 ・目の健康については、1日のスマホやタブレットの使用時間の規制をするとよい。 ・少しずつ地域の人との関わりがあると良い。Ex.矢田野用水、御畠（おわた）太鼓 ・６年生には、中学校に向けての目標を持たせるようにすると良い。また、その他の学年にも、キャリア教育として、将来を見据えて今自分が取り組むべきことを考えさせる機会を持つと良い。 　参考著書：「１３歳のハローワーク」 ２）中間→年度末評価（＆改善策）を受け ・世代交代が進み、若手教員の割合が増えている。研修を通して、授業力はもちろん、教員としての力をつけていってほしい。あいさつなど子供のお手本となるような行動を大切にしていってほしい。 ・教員の業務改善に向け、教員の人員確保が必要だが、少子化が進む中そのことが難しい現状である。地域がしっかりサポートしていかなければならない。 ・保護者のニーズに応じていくことは必要だが、ものの考え方の違いや限界もある。小学生の親の世代は、20代～30代と若く、ものの考え方などジェネレーションギャップを感じることも多いのではないか。そのような違いを念頭におきながら、学校運営を進めていくとよいのではないか。